

「秋」の講座が始まりましたⅡ



『文学と歴史講座』

藤沢周平の作品を通して、江戸時代の生活と人情を訪ねます。



『俳句入門講座（後期）』

俳句の知識や作り方・鑑賞の仕方について学んでいます。



『自由律俳句入門講座』

一放哉・山頭火の世界ー自由律俳句を初めて学ぼうとする人の講座です。

文芸館主催『朗読会』近づく！

「藤沢周平を読む」をテーマに、堤腰和余氏（K朗読研究会主宰）による朗読会が行われます。

今回の作品は、『約束』（橋物語から）。

本年度は、「文学と歴史講座」でも藤沢周平の作品を学びましたが、江戸時代の町人の生活と人情の世界を、朗読によって味わっていただきたいと思います。

10月26日（日）午後2時～



お知らせ

企画展

『秋山鐵夫の
絵と詩で紡ぐ癒しの空間』
11月3日（月）まで
是非ご覧ください！

文章教室Ⅲ・・・募集中！

文章の書き方を1から書きながら学びます。（大人向け）
往復はがきにて11月29日まで

文芸館の四季

文芸館の事務室の裏に咲いていた花の名前を知りたくて、写真に撮ってロビーに掲示をしたところ、来館者の方から「サンジソウ（三時草）」という名前だと教えていただきました。午後三時ころになると花を咲かせることからサンジソウと言われるそうです。

インターネットで調べたら、「ハゼラン（爆蘭）」「ハナビグサ（花衣草）」とも呼ばれることがわかりました。

どこにでもひっそりと咲いている野草ですが、ピンクの花が可憐です。



＜サンジソウ（三時草）＞

井上靖と浜松 5

花井先生、弁天島の水泳訓練

浜松中学時代に忘れられない峻厳極まりない体操教師のことを、靖はあちこちで書いている。昭和45年の「潮」3月号に書いた「容さざる心」につぎのような一節がある。

級長をやっていた私は、体操の時は一番右に並んだ。他の者は背の高さの順に並んだが、私だけが特別に、一番長身の生徒の右に並ばされた。歩調をとって先頭に立って歩くのが苦手だった。背の低い私は、自分のあとに続く長身の生徒たちと同じ歩調をとることができなかった。

Hは遠くから駆け寄って来ると、私を激しく叱咤した。整列している時も、Hは駆け寄って来た。私の右手か左手が鳴った。時には首を捻じ曲げられることもあった。確かに私は体操が下手であり、気をつけの姿勢をとっても、しゃんとしたところがなかったに違いない。他の授業では、級長であるということのために、多少特別扱いをされたが、体操の時間だけは反対だった。級長であるということのために、Hは私に対して容さざる心を持ち続け、いささかの仮借もしなかったのである。

沼津中学転校が決まった時、校庭でHと顔を合わせた。怯えた気持ちで挙手をすると、Hは近寄って来て「いくら成績がよくても体が虚弱ではだめだ。毅然たる精神を持て」と言った。靖は、「いつものように厳しい顔をしていたが、私にはその時のHが堪まらなく優しく思われた」という。

短編小説「孤猿」では、石村東平の名で登場してくる。五十を幾つか越した最古参の教師で、教頭の地位にあり、「五尺六、七寸ある逞しい躰と、白い口髭と、苦虫を嚙みつぶしたような絶対に笑うということのない赤ら顔とを保持していた」東平は、一方「孤猿」という号を持つ俳人だったとある。

花井楊五郎は、加藤雪腸（孫平、俳人・歌人、国漢）、原田浜人（俳人・英語）、中島田人（敦の父、漢文）と同僚だった時期がある。

花井先生に注意されたように、浜松中学時代の靖は勉強中心の虚弱な優等生だったようだ。浜松中学時代、一番印象に残っている靖の思い出は、夏休みの数日間弁天島で行われた水泳訓練だった。今切の潮の波立つ様子がサイダーの波立ちのように新鮮で、その遠い一点に眼をやっていると、心が洗われるようだったという。

昭和30年冬、35年ぶりに弁天島を訪れた靖は次のように記している。

私たちは「つばめ」を浜松で降り、そこから自動車で弁天島へ向かった。浜名湖の中の流砂で出来たこの小さい島は私には懐しいところである。わたしは浜松の中学校に一年間だけ在学したが、その一年生の夏、毎日のように汽車で浜松からここへ通ったものである。弁天島はその頃と何も変わらない。松林の中の旅館が増えたことと、競艇ができて北弁天の湖面が異様な騒がしさに包まれていることぐらいであろうか。(略) 私は、弁天島に立って遠くに今切を望むのが好きである。そこにだけ白い波が砕け散り、いかにも湖の口といった新鮮な感じである。(「早春の伊豆・駿河」)

この時からさらに50年余、弁天島は大きく変貌した。今来たら靖は何と書くだらうか。